

不登校を経験した音楽家「Kyosu-!」氏の軌跡と洞察:ブリーフィング資料

本資料は、不登校支援コミュニティ「ハートスクール」による、音楽家・作曲家として活動するKyosu-!氏へのインタビュー内容をまとめたものである。同氏の壮絶な不登校経験と、それを乗り越えて現在のクリエイティブな活動に至るまでのプロセスを詳述する。

エグゼクティブ・サマリー

Kyosu-!氏の不登校経験は、小学校から高校にかけて「シーズン1」から「シーズン4」まで多層的に展開されており、その背景には教員との不和、過度な学習プレッシャー、家庭内暴力(虐待)、そしてSNS上のトラブルといった現代的な課題が複雑に絡み合っている。氏は深刻な摂食障害(拒食・過食)やうつ病を患いながらも、音楽やプログラミングという「居場所」を自ら構築することで、自己を維持してきた。現在は大学生として学びながら、ゲーム音楽制作や音楽レーベルの運営、メタバース空間での活動など、多角的な音楽家として歩んでいる。同氏の経験は、不登校が単一の原因ではなく、環境の不適合や人間関係の蓄積によるものであること、そして「怒り」という感情が現状打破のエネルギーになり得ることを示唆している。

1. Kyosu-!氏の現在の活動

不登校という困難な時期を経て、現在は多方面でクリエイティブな才能を発揮している。

- 音楽制作: ゲーム音楽の作曲、音楽アルバムの制作。主にハードコアやブレイクコアといったジャンルを得意とする。
- レーベル運営: 音楽レーベルを主宰。自ら人を集め、リリースをプロデュースしている。
- メタバース活動: VRチャット等のメタバース空間におけるDJ活動。
- 将来の目標: 小学校時代からの夢である「ゲーム関連の仕事(サウンド関連)」に深く携わること。すでに一部のゲーム制作プロジェクトにも参画している。

2. 不登校の変遷(シーズン1~4)

Kyosu-!氏は、自身の不登校経験を「シーズン」という言葉で定義し、それぞれの時期における背景と苦悩を語っている。

シーズン1: 小学校5年生(教員との不和と拒食症)

- 原因: 担任教員からの不当な扱い。些細な理由で1週間にわたり掃除の時間に立たされ続け、「納得のいく謝罪」を強要された。謝罪しても「パフォーマンス(見せかけ)だ」と一蹴される。
- 症状: 深刻なストレスにより拒食症を発症。スプーン一杯の米も食べられず、骨が浮き出るほど激痩せした。
- 転機: 親に相談した際、「行かなくていい」と肯定されたことで考え方が変わった。

シーズン2: 中学校(ネットトラブルと教員の不適切な対応)

- 背景: 中学受験を経て環境をリセット。コンピューター部でのプログラミングに居場所を見出す。
- 原因: Twitter(現X)での活動が学校側に露呈。担任・副担任による執拗な指導、プロジェクトで全投稿を親の前で晒されるといったプライバシーの侵害。
- 教員の言動: 部活動(コンピューター部)を「座っているだけで楽」と運動部と比較して蔑まれる。
- 症状: 拒食から一転し、ストレス発散のための過食へと移行。

シーズン3: 中学校(家庭内プレッシャーと虐待)

- 背景: 教育熱心な親族(母方の祖父母が塾経営者)からの過度な期待。
- 原因: 毎日10~20時間の強制的な学習。間違えると机を叩く、椅子を蹴るなどの威圧。さらに、母親からの長年にわたる身体的・精神的虐待(スマホや瓶を投げつけられる等)。
- 転機: 抑圧が限界に達し、学校で椅子を投げ飛ばすほど激昂。この「爆発」により、周囲が本人の限界を察し、長年の拘束(勉強の強要)が解かれた。

シーズン4: 高校・現在(アイデンティティと新たな葛藤)

- 背景: 通信制高校(N高校)へ進学。音楽レーベル設立などの成功体験を得る。
- 原因: 内部の人間関係のトラブルや、自身のセクシャリティ(バイセクシャル)にまつわる悩み。失恋を機に、親との対立や再度の精神的不調(うつ・嘔吐)を経験。
- 現在: カミングアウトを経て、大学に通いながら、自身の体調や複雑な人間関係と向き合い続けている。

3. 核心的なテーマと考察

ソースコンテキストに基づき、以下の3点が重要なテーマとして抽出される。

① 居場所としてのクリエイティビティ

不登校期間中であっても、プログラミングや音楽、リズムゲーム(音ゲー)といった趣味が、氏にとっての強力な生存戦略となっていた。特に、既存のコミュニティが崩壊した際に「自分自身のレーベル」を立ち上げ、周囲を巻き込んでいく行動力は、不登校経験が必ずしも停滞を意味しないことを示している。

② 教育・支援現場の課題

インタビューで語られた教員の対応は、極めて深刻である。

- 謝罪の強要: 本人の内面を否定する形での指導。
- プライバシーの無断公開: 生徒のSNSを親の前で晒す行為。
- 多様な価値観の否定: 文化部を運動部より下に見る、ジェンダーへの無理解(祖父母の例など)。

③ 「怒り」のポジティブな側面

氏は「怒りの力が残っていてよかった」と振り返っている。長年の抑圧に対し、沈黙するのではなく「爆発」という形で拒絶を示したことが、結果的に家庭内での強制的な学習環境を終わらせるきっかけとなった。

4. 注目すべき言及(重要引用)

カテゴリ, 発言内容

教員への絶望, 「謝罪した時は『お前そんなただのパフォーマンスやんけ』と言われて。見かけ上の罪なんかいらんわ、と言われた時は『はあ?』って思って学校行かなくなっちゃいました。」
家庭環境, 「間違ったらベシン! みたいな。……間違えることがすごく怖くなっちゃって。それが今もあって、かなり苦しいところなんです。」

自己防衛, 「優しくしすぎて本当にダメなんで。自分の身を削ってまで優しくしちゃうと、相手のためにもならないし、何よりも自分の人生を棒に振ることになる。」

怒りの力, 「(椅子を投げ飛ばして)そこで切れてなかったら、もう自分やばかったなと思います。……環境から離れることができるようになったのが、自分の中にあった怒りの力だった。」

結論

Kyosu-!氏のケースは、不登校が「本人の問題」ではなく、外部環境(学校・家庭・ネット)の複合的な圧迫によって引き起こされるものであることを鮮明に描き出している。同時に、特定の分野への深い没頭や、既存の枠組みに囚われないクリエイティブな活動が、回復への重要な鍵となることを示唆している。氏は現在も精神的な後遺症と戦いながら、それらを作品へと昇華させるプロセスの中にある。